



予約する  
ギリギリ  
ス

川崎ゆきお

涼しくなりだしたとき、キリギリスは早い目に蟻の家を訪ねた。転ばぬ先の杖、早い目早い目の対応に出たわけだ。

「食べるものを分けて下さい」

蟻は暑い日でも汗をかきながら作物を栽培したり、木の実、草の実を保存していた。

「まだ冬ではありませんが」

「だから、早い目をお願いに来ました」

「今なら、まだ食べるものは野山にありますよ。今からでも遅くありませんから、冬備えには間に合います」

「ところがイベントが入りまして、冬前まで忙しいのです」

「何のイベントですか」

「当然、音楽です」

キリギリスは夏の間も、ずっと楽器の練習をしていた。

「じゃあ、その出演料で食べ物を買えるじゃありませんか」

「ノーギャラなんです」

「おやまあ」

「だから、道楽です」

「出演料が出るほど有名になって下さいな」

「いや、一円も出ないわけじゃないですが、それでは食べていけないのです」

「どちらにしても、頑張りなさい。いや、そんなことより、自分の食い口ぐらいは自分で調達しないといけませんよ」

「練習やイベントで忙しくて、野に出られないのです」

「困った人ですねえ」

「この国の文化のためです」

「あ、そうなの」

「はい、みんなのためになることをやっています。そして文化度を上げる大事な仕事なのです。決して個人的な楽しみでやっているわけじゃないのです。だから、キリギリスさんの援助は国のため、文化のために役立ちます。だから、寒くなってきたら食料を分けて下さいね。今はまだ拾い食いができますが、そのうち野からも山からも食べるものがなくなります。熊さんなんて、食べるものがないので、冬眠するほどですから」

「しかし、早い目の予約ですねえ」

「はい、例年なので、急に言い出すとお困りになるはずなので、予約を入れたわけですよ」

「分かりました。私の食料がお役に立つのなら、喜んで差し上げましょう」

「有り難うございました。これで、安心して冬までのイベントに参加できます」

そのイベントだが、一般客は来ず。仲間内の道楽者しか集わない道楽イベントだった。

了